

「すべての人を照らす真の光」

マルコ 4:20～21

■ はじめに

私たちは一人では何もできないと思いますが、世界を変えたのはいつも一人の人の思いです。確かに一人ではできないが、あなたと共にくびきを負って進もうとする方がおられ、そのかたは命がけでこの世に生まれてこられました。それが2000年前に起こったクリスマスのストーリーです。

組織や国家は大きな存在として時に私たちの心や考え方を支配することがあります。会社に属していたり、地域の価値観、日本の風習や考え方、今までの歴史……。しかし、私たちは当たり前と思っているこのことを当たり前が続けていて良いのでしょうか？確かに今までそれによって成されてきた営みがあります。しかしそんな歴史の中で、いつも勇気を持って志を受けた人、または、何かおかしいのでは？と疑念を感じた人が立ち上がって世界を変えてきました。

マルコ 4:20 『良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、30倍、60倍、100倍の実を結ぶ人たちです。』

マルコ 4:21 『また言われた。「あかりを持って来るのは、柀の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。』

マルコ 4:22 『隠れているのは、必ず現れるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるためです。』

あなたの心に与えられた光は、私たちがその光を燭台の上に置くためだったとこの箇所で言われています。

■ 幕屋

いまから数千年も前、モーセは神さまを礼拝するために幕屋を建てました。幕屋は三つの構造でできていました。聖所と至聖所はジュゴンの革で覆われている真っ暗な部屋です。2000年前、イエス・キリストは、家畜小屋で生まれました。感謝して入ることができない、喜ぶことができない私たちがいる、先が見えない真っ暗な場所で、光になるために、家畜小屋で生まれたのです。私たちの心の深いところにある古い価値観の傷ついた心を照らすためです。そして幕屋には庭があります。庭を覆う壁がありました。そして、入り口に“感謝の門”という門がありました。ダビデは、感謝しつつ主の門に喜び歌いつつ主の大庭に入れ、と言っています。そして、イエス・キリストは、狭い門から入りなさい。滅びにいたる門は大きく、それを見出すものはまれである。と言いました。すなわち、私たちの人生で、感謝することはむずかしいのです。とても感謝できない状況の時に感謝しなさいと神さまは言われているのです。

なぜ私たちが進む道は暗やみなのでしょう。それは、私たちが見る目を失っているからです。だから、目がある者は見出すことができる、と言っているのです。そこで感謝して主の門に入った人は、次に進んで行くのです。次に進むには、また大きな壁があります。

自分の人生の歩みを振り返ってみませんか？その人生にはたくさんの方があつたでしょう。もしかしたら、それによって、今、あなたの心に闇があるのかもしれない。しかし、そこに光をともすために来られた人がいるなら、迎えることはできませんか？あなたは、本当は大事だったものを壊してきませんでしたか？本当は大事にしたかったものを傷つけてこなかったでしょうか？人はしたいと考えることができなくて、ことさらしたくないことを行なってしまう、とローマ人の手紙に書かれています。

■ クリスマスの奇跡

100年前、クリスマスの第一次世界大戦の戦場で、ある一人の兵士が“きよしこの夜”を歌い始めました。その賛美が、戦場にいた敵の兵士たちの心をも変えていきました。憎しみと怒りに満ちていた戦場に、愛と喜びが生まれたのです。そして、つかの間でしたが、和解が生まれました。あなたは、人生という戦場で痛みの中にいるかもしれないけれど、“きよしこの夜”を歌い始めると、あなたの心に光がともされるのです。赦せなかった人を赦さなければ、という思いになるのです。しかし、それは私たちの心ではできません。それは過去があるからです。イエス・キリストは、その過去をすべて取り去るために、あなたのために、十字架にむかっていきました。イエス・キリストは、くぎづけにされた十字架のうえで、人を指ささず、人のせいにならず、「主よ、彼らは何をしているかわからないのです。彼らの罪をゆるしてください。」と祈ったのです。私たちが本来しなければいけないことをされたのです。そして、あなたの心の闇をおろして、過去にとらわれず、戦争のような人生の中で、私に歌え……。とされています。

■ さいごに

イエス・キリストは、人知れず家畜小屋で生まれ、人の数にも数えられず、エジプトに逃れ、命を狙われながら、しかし、十字架の道にむかって行ったのです。その時人々には理解されませんでした。最後に人々はそれが自分への愛だと知るのでした。

私たちがとるべき行動は何でしょうか？まだ、あなたは、人のせいにして、自分のせいにして生きていますか？それとも今日、神さまの前に立って、「私は何をすればよいでしょうか？」「この暗闇の中で、どこへ進めばよいでしょうか？」「もしあなたが光なら、私の心に光をともしてください。」と祈ることもできるのではないのでしょうか。

一人の人が、あなたのために死にました。でもあなたは、まだ心を頑なにしますか？いろいろな価値観、知識、経験、文化があるでしょうが「感謝しつつ主の門に」です。私たちは素直になることができるのです。「神さま、私の人生をあなたにゆだねるので、今日、私の心に光をともしてください。」と祈りませんか。もし、あなたが祈ることができれば、あなたの心の光が多くの人の心にともるクリスマスになるかもしれません。

(要約者:秋山 恭子)

(2022年12月25日)